愛知教育大学研究報告，50（人文・社会科学編），pp. 232～225, March, 2001

白話詩における人力車夫

高橋みつる（国語教育講座）

一、はじめに

本稿は、白話詩という文学ジャンルの中で、人力車夫がどのように描かれてきたかを、題材論的観点から、具体的作品に即して分析し、白話詩の発展過程における人力車夫文学の位置と意義を考察していくものである。

なお、白話詩というのは文言詩に対する名称であり、現在では、五四初期の白話詩を含めて、その後の口語で書かれたものすべてを新詩と称することが多い。本稿では、対象となる詩が初期のものを中心とするため、原則として、白話詩の名称を用いるが、五四時期以後の口語詩の歴史全体を意味する場合には、適宜、新詩の名称を用いることとする。

二、白話詩の出発と人力車夫

文学革命の初期から一九三〇年代半ばにかけて、人力車夫の厳しい労働と貧しい生活を、知識人の視点から同情の眼で描いた文学作品が数多く出現した。この時期に、文学表現の対象として人力車夫が注目された背景には、「労工神聖」という労働者尊重の社会風潮や、人道主義などの新思潮の影響があることは、既に拙論「中国近代における人力車夫文学について（上・中）[1]」において述べた。そして、白話詩八首を含む十八篇の作品を提示した上で、まず、小説四篇と戯曲一篇について内容の検討を試みた。それら十八篇の作品の中で、最初の人力車夫文学となったのが、沈尹黙と胡適の同題の白話詩「人力車夫」である。それは、一九一八年一月一五日『新青年』第四巻第一号に掲載された、三人の作者による九首の白話詩の内の二首であった。

中国における最初の白話詩は、その前年の『新青年』第二巻第六号に発表された胡適の「白話詩八首」である。しかし、それらは本人も認めているとおり、口語が韻文の道具たりうるかどうかを試す実験的な試作品に過ぎなかった。新文学史では、上述の九首の詩を以て本格的な白話詩の濫觴とするのが、一般的なようである。[2] 人力車夫は、白話詩の出発の時点で選択された主題・素材の一つであった、と言うことができよう。

以下に、その後の調査で新たに判明した詩数首を含めて、人力車夫を取り上げた白話詩を、改めて発表時代順に記しておく。

①沈尹黙　人力車夫　『新青年』　一九一八年一月一五日
②胡適　人力車夫　『新青年』　一九一八年一月一五日
③劉半農　車毯（擬車夫語）　『新青年』　一九一八年二月一五日
④周恩来　死人的享福　『覚悟』　一九二〇年一月（一九年十二月執筆）
⑤葉聖陶　人力車夫　『晨報・副刊』　一九二〇年八月一九日
⑥劉大白　包車的杭州城　『民国日報・覚悟』　一九二一年三月九日（三月七日執筆）
⑦陳南士　走路　『詩』　一九二二年一月一日
⑧顧頡剛　春雨之夜　『詩』　一九二二年二月二〇日
⑨馮文炳　洋車夫的児子　『詩』　一九二三年五月
⑩劉半農　擬擬曲（一）[3]　『京報・副刊』　一九二五年二月二一日（二四年十月二六日執筆）
⑪劉半農　擬擬曲（二）　『語絲』　一九二五年九月二八日（九月十六日執筆）
⑫聞一多　天安門　『晨報・副刊』　一九二六年三月二七日
⑬聞一多　飛毛腿　『死水』所収　一九二八年一月
⑭臧克家　洋車夫　『烙印』所収　一九三四年三月（三二年執筆）

以上の作者の顔ぶれを見ると、先に触れた沈尹黙・胡適を始めとして、白話詩

の創始・確立に寄与した文学者たちの多くが、人力車夫という題材に取り組んでいることがわかる。⑦陳南士の伝記が未詳である[4]以外は、いずれも文学史に名を留める著名な作家たち（ただし、周恩来は政治・顧頡剛は歴史学）である。もっとも、ここに挙げた詩は、人力車夫を描いた新詩として、後の文学史や研究論文において言及されたものが大半を占めているものであり、このほかに、無名の作家の作品や現在では見ることのできなくなった佚詩などもあるかと思われる。

上記作品一覧の発表（執筆）年月日を見ると、人力車夫を描いた白話詩が多く書かれた時期は、人力車夫文学全体の中でも、比較的早期に集中している。孟隣「新文学早期的人力車夫形象[5]」は、人力車夫文学の最初の高潮期を一九一八年から一九二四年としているが、その基準に従えば、①沈尹默から⑩劉半農までの作品、つまり十四首中十首がこの第一高潮期に書かれている。小説、戯曲など他の形式の作品が、二五年以後にもほぼ持続的に書かれているのに比べると、白話詩では、短期集中的に人力車夫が取り上げられ、早い時期に他の題材に移っていったということであろうか。

三、詩の背景設定

まず、これらの詩を概観して、各作品の背景となる場所や季節、車夫の特徴について見ていきたい。詩に詠まれた場所は、必ずしも直接言明されてはいない。しかし、前章に述べた、書かれた時期とも関連するのだが、作者の居住地・掲載誌の発行地・言語の特色などから、北京を舞台とするものが多いと推測される。

例えば、①沈尹默・②胡適・③劉半農は、いずれも当時北京大学に在職中であり、『新青年』の編集に携わっていた。⑦⑧⑨は、掲載された『詩』が、北京で創刊された雑誌である。加えて、⑧顧頡剛はその年の春、祖母の病気で北京を離れるまでの九年間を、北京大学で学生及び教師として過ごしており、⑨馮文炳は北京大学予科在学中である。また、この⑨は、題名に含まれた「洋車夫」という名称からも、北京の車夫であることが予想される。⑩は、詩題の後に、北京の二人の車夫の対話であることが作者自身によって付記されており、同じ劉半農による⑪の作品も、執筆場所が北京と明記されていることや、その言語的特徴などから、北京の車夫を想定して描かれたものであると考えられる。⑫聞一多は、題の「天安門」からも、またその内容からも北京であることは間違いない。同じく⑬も、言語的特徴から北京と判断される。以上十首は、おそらく北京での作者の見聞や体験をもとに書かれた詩であると考えることができよう。

ちなみに、その他の場所と推定されるものについて、④周恩来は、当時、南開大学文科の学生であり、天津学生聯合会の代表の一人として、逮捕された同志の釈放を求めて北京に出かけて行ったりもしている。従って、天津とも北京とも特定できない。⑤葉聖陶は、蘇州出身で、2年間上海の小学校で教えた後、蘇州の角直で教職に就いている。少なくとも北京で暮らした経験はないので、上海や蘇州での見聞に基づくものと思われる。⑥劉大白は、題に示されたとおり杭州での感慨を表現したものである。⑭臧克家は、「洋車夫」という題から見ると北京のように想像されるが、実は、青島大学在学中に眼にした光景が下敷きとなっている。彼は後にこの詩の作られた経緯を述べた文章[6]の中で、青島にいたとき、しばしば車夫がのろいと言っては罵られる場面に遭遇し、さらに、酔っぱらったアメリカの水兵に鞭打たれるのを目撃したこともあると語っている。そして、「（青島：筆者）大学の正門を出ると、人力車がずらりと列をなしており、人が来るのを見ると、争って客を奪い合うのが眼に入った。……」と述べている。

北京を舞台とする作品が多い背景には、北京がその時期の文化の中心であり、新文学を担う知識人の多くが、大学教師或いは学生として、この都市に集っていたことがある。そして、その北京が、電車やバスなどの公共交通機関の発達が遅れ、長い間人力車が主要な交通手段となっていた都市であったからであるが、車夫と知識人との関係については、既に拙論で述べているので詳述しない。

同じように都市労働者を描いても、詩歌のような短い形式の場合、小説や戯曲と違って、詩の中で舞台となる空間（場所）が具体的に明示されていることは少なく、また、必ずしもそれが重要となるわけでもない。わずかな事例として、②胡適が、最終行[7]の「内務部」という固有名詞によって北京を連想させ、⑥劉大白が、杭州城内の繁華な様子をお抱え人力車の往来に象徴させているが、どちらもその場所性を取り除いたとしても、詩の持つ意味や情調を大きく損なうものではないと思われる。例外なのが、⑩から⑬の四首である。いずれも、車夫同士の対話か車夫の独白体の作品で、そこでは北京の車夫であることが、詩にリアリティと躍動感を与える上で、非常に重要な要素となっている。

次に、詩の背景として設定された季節・時間・天候についてみていくと、はっきり冬と断定できるのが①③④、②も少年車夫の言葉から寒い季節であることが推定される。⑧は、季節は春であるが、夜も更けて寒風と大雨という悪天候の中に車夫は身を置いている。⑭も、季節は示されていないものの、やはり、激しい風雨の夜更けである。人力車に乗る客にとって、厳寒の冬や悪天候の時に、車夫の苦労がより強く感じられるのは事実ではあろうが、文学作品におけるこのような設定は、車夫の厳しく辛い労働を際立たせるために、小説でも比較的よく使わ

れる一種の常套手段でもある。①から④の最初期の白話詩は、こうした一つのパターンを作り出し定着させる役割を果たしたとも言えよう。しかし、その後の白話詩は、このパターンに安易に寄りかからず、それぞれに独自の状況を設定しようと努めているように思われる。

最後に、白話詩に登場する車夫の年齢や身体的特徴をみてみよう。②は十六歳の少年で、車夫業に従事するには幼すぎるため、客にも敬遠されがちで、飢えと寒さに苦しめられている。⑤の車夫は、年齢が乗客である私の二倍もあり、体も丈夫そうではない。⑪は、老九と呼ばれる車夫の一生を描いたものであるが、貧苦のため病身をおして働き続け、悲惨な最後を遂げる。小説や戯曲では、体力が弱く稼ぎの少ない少年車夫や老人車夫、或いは病気の車夫が描かれることが多いが、白話詩の中では、以上の三首がそれらに該当する他は、車夫の肉体的状況についての具体的な描写はない。これも、短い形式の文学であるが故の結果であり、制約された表現形式の中で、作者がそうした車夫の人物そのものよりも、より強く訴えたい事柄に紙数を費やした結果であろう。

四、作品の視点と描写の手法

さて、ここからは、どのような視点から、どのような方法で、何を表現しているか、ということをみていきたい。あらかじめ、小説における典型的な内容を示しておくと、乗客である私の視点から、車夫と乗客との対比という方法で、車夫の厳しい労働と貧しい生活に対する同情が描かれている。

はじめに、作品の視点についてであるが、語り手が誰であれ、常にその作品を鳥瞰し支配する、神の眼とも言うべき作者の眼が存在することは、自明のことである。そのことを前提とした上で、作品中の語り手に注目すると、白話詩では、大別して、〔詩中における観察者である作者（以下「詩中における」は省略）〕・〔第三者〕・〔車夫〕・〔乗客である私〕の四視点で語られている。ただし、〔観察者である作者〕と〔第三者〕との境界は曖昧である。

〔観察者である作者〕の代表的な例、⑦陳南士の「走路」では、作者と想定される「私」は、急ぎ足で道路を歩き、額や鬢に汗を滴らせている。そして、その視線を、街を行く大勢の人力車夫と車上の人に向けるのである。ここで〔観察者である作者〕と判断する根拠は、詩句の中に「私」が登場し、人力車に乗っていないその「私」の観察を通じて車夫が描かれるものである。①沈尹默の「人力車夫」を、孟隣[8]は「人力車を見る者の視点から車夫を取り扱っている」と述べているが、上の判断基準からいえば、〔観察者である作者〕には分類されない。なぜなら、詩中に明白な形で「私」が登場しないからである。二行目「家を出て、人力車を拾う」の主体は誰なのか。それが「私」＝作者であるとすれば、次行における車上の人々の寒さの感覚も、「私」の実感から発せられた言葉であり、〔乗客である私〕の視点となる。また、これは、すべてが一段高い位置から客観的に描写されたもの、すなわち〔第三者〕の視点ととらえることも可能であろう。[9]もう一首判断し難いものは、⑥劉大白の「包車的杭州城」である。第三聯は、一人のお抱え車夫に暮らし向きを訊ねる人と、それに答える車夫の会話のみで構成されているが、この質問者が作者の分身である可能性はきわめて高い。だとすれば、この作品もまた、「私」と明示されないが、〔観察者である作者〕の視点で書かれたものとみることができよう。

二番目の〔第三者〕の視点で書かれた詩は、⑧顧頡剛・⑨馮文炳・⑭臧克家の各詩である。問題となるのは、②胡適の「人力車夫」であるが、孟隣は、「乗客の視点から車夫を描いている」ととらえている。この詩に関して、しばしば、乗ろうとした人力車の車夫がまだ幼い少年であったから起こった同情心であることをもって、客の、さらには作者胡適の同情心は大変浅薄だと、まるで詩中の客がそのまま胡適自身であるかのように断ずる論調[10]を眼にするが、これは、作中人物の客と作者を単純に同一視しているからであろう。確かに、作中人物に託された問題意識は、作者の問題意識を離れるものではない。しかし、この詩は、あたかも戯曲の台本の一部を抜粋したかのような形式であり、決して客＝作者ではない。作者の眼は、客からも車夫からも独立した位置にある。従って、これは〔第三者〕の視点で書かれた詩と考えたい。

三番目の〔車夫〕の視点というのは、ごく単純に車夫の独白、または車夫同士の会話で構成されている作品で、③⑩⑪⑫⑬が該当する。車夫の視点といっても、当然ながら、車夫に語らせている者が作者であることはいうまでもない。

小説で一番多い〔乗客である私〕の視点は、白話詩では思いの外少ない。④周恩来「死人的享福」と⑤葉聖陶「人力車夫」の二首のみである。二首とも、「私」が人力車に乗り込んだ後、車夫の労働を眺めて、乗客の立場で感ずるところを表白している。この場合、「私」は、ひとまずは作者自身と考えてよいが、また広く乗客一般と読むこともできる。白話詩になぜ、乗客の第一人称で語られた作品が少ないのか、現在のところ、私自身説得力のある理由を見いだしていない。

次に、描写の手法についていえば、視点の如何に関わらず、車夫と乗客との対比を用いている作品が最も多い。この点では、白話詩以外の他の形式のものと一致している。この車夫と乗客との対比が鮮明なものとして高く評価されている[11]の

二一

が、①沈尹默の「人力車夫」である。三行目「人力車上の人は、皆綿入れを着て、袖に手を入れて座っているが、それでも風が吹いてくると、寒くてたまらない」、四行目「車夫の単衣は破れているが、玉のような汗が次から次へと流れ落ちている」。乗客の綿入れと車夫の襤褸の単衣。暖かい服に身を包んでいながら、なお寒さが身に応える乗客と、厳寒というのに、薄着でも汗だくの車夫とが対比されている。よく似た対比がなされているのが、④周恩来の「死人的享福」である。四・五行目「車夫は綿入れの上着を身につけ、／私も綿入れの上着を身につけている」、六・七・八行目「私が着ているのは、寒いのがいやだから、／彼は着ているとかえって邪魔になるから、／脱いで私の脚にかけてくれる」、九・十行目「私は彼の思いやりに感謝し、／彼は私の手助けと協力に感謝する」、そして、最終行は「生きた人間の労働！　死人の幸福な生活！」。車夫を「活人（原文）」、乗客＝「私」を「死人（原文）」と断言して、明らかな対照を示している。また、この言葉は、当時胡適が提唱した言文一致における「活字（生きた文学）」「死字（死んだ文学）[12]」を容易に連想させ、そこに新と旧という時代の価値観やその対立が暗示されているようにも思われる。さて、⑥劉大白の「包車的杭州城」は、他の詩と違って、珍しくお抱え人力車を描いている。お抱え人力車を所有できるのは、社会的地位・身分のある人や経済的にゆとりのある階層に限られる。三・四行目「車上の人は偉そうにふんぞり返り、／車引きは縦横無尽に駆け回る」、五・六行目「車上の人は体をゆらゆら揺らし、／車引きは意気軒昂」。自家用や月極で特定の主人に雇われるお抱え車夫は、ふりの客相手の車夫に比べれば、収入面で安定しており、それが力強い駆けっぷりにも表れているようであるが、それにもまして、雇い主の悠然たる態度が、乗る人の階級的優越性を象徴しているように思われる。

安楽を享受する乗客（階級）と激しい労働を提供する車夫（階級）との対比は、もう一歩誇張化されて、無慈悲な乗客と酷使される車夫という構図にもなる。⑧顧頡剛の「春雨之夜」の車夫は、激しい風雨の夜更けに、ずぶぬれで泥水に足を取られながら、やっとの思いで目的地までたどり着く。車夫が「きょうは道が走りにくうございましたので、どうか旦那様、車賃を少しはずんで下さいまし！」と言うと、客はそそくさと中に入り、大声でこう叫ぶ。「長い時間車に乗っていたので、凍えて足が鉄のようだ。二倍の車賃をやったのに、身の程もわきまえず、まだ足りないなどとぬかす。」客の家族は「車夫なんかにかまってないで、早く休みなさいよ」と答える。この客は、車夫をステッキで殴ったり、車賃を踏み倒すといったような類の乱暴な人間ではないが、少なくとも、悪条件の中を苦労しながら運んでくれた車夫に対して、同じ人間としてのいたわりやねぎらいの気持ちなど微塵も有していない。

乗客と車夫の立場を対比するとき、一種の小道具を効果的に使って印象づける作品もある。⑦陳南士の「走路」では、ハンカチによって、「私」・車夫・乗客三者の違いが浮き彫りにされる。歩く「私」は、あふれる汗を「手帕（原文）」でぬぐえばそれで済む。しかし、街を行く人力車夫たちは、背中中びっしょり汗をかいて、上に羽織ったお仕着せまでしみ通っているのに、「帕子（原文）」を使おうともしない。車上の美しい女たちは、手にきれいな「絲帕（原文）」を持っているが、それは自分の涙を拭くために用意されたものであろう。ハンカチという名詞の微妙な使い分けとともに、汗をぬぐう暇もない、あるいはハンカチでは滴り落ちる汗をぬぐいきれない程の重労働を強いられる車夫と、労働とは縁のない乗客の女性たちとが鮮やかな対照を見せている。ここに描かれた女たちは、常識的には、裕福な家の婦女だと考えられるが、また、妓楼の娼妓だと考えることも可能であろう。娼妓であるとすれば、自分の身体を頼りに生活しているという点で、車夫と同じような労働者であり、むしろ、その労働の質が対比されているととらえることもできよう。③劉半農の「車毯」は、商売道具の毛布をめぐる話である。寒くなったので、車夫はあり金をかき集めて美しい毛布を買った。これがあれば、旦那方が多めに車賃を払ってくれるかもしれないと、期待に胸ふくらませる。あるとき、車を引いて流れた汗が、北風に吹かれて凍え死にそうになり、自分でもその毛布を羽織ってみたいと思うが、毛布を汚してしまうのが心配だ。この詩では、直接的には乗客は出てこないが、車夫の想像上において、毛布をかけて心地よさそうにしている乗客の姿が彷彿とされる。それに対して、車夫は、寒くて凍えそうでも、その大切な毛布で暖をとることはできないのである。この他、先に取りあげた①沈尹默「人力車夫」の綿入れと襤褸の単衣、あるいは、④周恩来「死人的享福」の綿入れも、同じような役割を果たしているといえよう。

以上述べた六首のように、乗客と車夫とが、明確な意識のもとに、対比的に表現されているわけではないが、②胡適の「人力車夫」と⑤葉聖陶の「人力車夫」も、乗客と車夫との関係性において問題が提起されている作品である。

このように見てくると、①から⑧までの全作品、つまり人力車夫を描いた白話詩の開始から半ばまでの作品が、すべて乗客と車夫との関係というひとつの枠組みの中でとらえられ、表現されたものであることがわかる。これは、単なる偶然であろうか。実は、この興味深い事実から、新文学草創期における作家たちの模索のあとが窺われるのである。文学革命で題材の拡大、特に下層社会の人々に眼を向けることが提唱されたとき、真っ先に取り上げられた労働者が、人力車夫で

あった。都市に住む知識人にとって、まだしも最も身近な存在であったからである。しかし、車夫の生活や精神世界を深く理解しているわけではない作家たちが、人力車夫を描こうとすると、まずは自分の体験、すなわち乗客としての自分の視点を通してしか、語る方法を思いつかなかったのであろうと思われる。このことは、当時の作家たちの表現上の限界を示しているとも言えよう。

では、その後、どのような新たな表現手法を見いだし得たのか。⑨馮文炳の「洋車夫的児子」は、仕事に出かけようとする車夫と、飴を買うお金をねだる息子との短いやりとり（ただし、車夫の妻らしき人物の言葉が挿入されているが）を写し取ったものである。⑩劉半農の「擬擬曲（一）」と⑪同「擬擬曲（二）」は、既に述べたように、ともに二人の車夫の対話である。「擬擬曲（一）」では、一九二四年の北京政変を背景に、その騒動を目撃した車夫の正直な感想が、政治の混乱と自分たち庶民の暮らしを引き比べながら語られる。そこには、対比の視線はあったとしても、もはや乗客と車夫という限定的な枠組みではなく、政治或いは政局と庶民という、より大局的な観点に立ったものである。「擬擬曲（二）」も、病気で死んだ車夫老九の運命が語られる中で、歴代総統や金持ちとの境遇の違いに言及している。⑫聞一多の「天安門」に登場するのは、語り手である車夫と、三・一八事件で弾圧され命を落とした学生たちの亡霊、そして、窮乏の末兵士となって戦死した、車夫の叔父である。また、⑬聞一多の「飛毛腿」が、題のような綽名を持つ一人の車夫の、一風変わった生活ぶりや人生哲学を、個人に密着して活写したものだとすれば、逆に、⑭臧克家の「洋車夫」は、暗闇の中で風雨に打たれながらじっと佇む車夫の姿が、抑制された言葉で静止画のように映し出された作品である。

これら後半の作品に、乗客の存在が認められなくなったことは、作家たちが、ようやく乗客としての視点を乗りこえ、人力車夫の生活や心情に、より接近し得たことを物語っているのではないだろうか。そして、その手法は、一言で表すことが困難な程、多様で幅広いものとなっている。

五、作品の主題

最後に、何を表現しているか、すなわち各作品の主題について、見ていきたい。白話詩でも、人力車夫の貧しい生活と激しい労働が表現されている点は、小説や戯曲と同じである。しかし、車夫に対する同情の念が、創作動機の根底にはあるものの、小説のように直接それを表したものが少ないのは、乗客の第一人称で語られた作品があまりないという、視点の問題にも関係するのであろう。最も多いのは、やはり、車夫の貧困を描いたものである。①②③⑥⑨⑩⑪⑫の八首が、それに該当する。二・三の例を挙げれば、②の少年車夫の言葉「おいら、半日仕事がなくて、寒くてひもじいんです。」や、⑨息子がほしがる飴を買うお金さえやれない車夫、⑪水害で食べるものにも事欠いているのに、迫り来る冬をどうやって生きのびようかと、途方に暮れる車夫の会話など、生活苦の悲哀を訴えかけるものである。次に、労働の厳しさを描いた作品は、①④⑤⑥⑦⑧の六首で、これらは、すべて、乗客と車夫との対比という手法が用いられており、また、①⑥の二首は、貧困の描写とも重複している。車夫の仕事がいかに激しく苦しいものであるかは、車夫の流す玉のような汗（①⑦）や、背中は曲がり、幾度も立ち止まって息をついてから走る様子(⑤)や、全身びしょぬれでもがくように進む情景(⑧)などによって、象徴的に表されている。

以上述べた、貧困と激しい労働という二つのモチーフは、いわば人力車夫文学共通の正統的な主題であるが、その他にも、少し異なる観点がいくつか提示されている。④周恩来の「死人的享福」は、これまで何度か言及したように、車上の「私」と車夫とを対比的に描いているが、気になるのが最後の二行、「共同生活だって？」「生きた人間の労働！　死人の幸福な生活！」である。当時の社会に、「共同生活」や「労資協作」という思潮があった[13]が、それは、労働者を利用するための、資本家階級に都合の良い論理であった。この詩は、車上の人、つまり支配者階級の安楽・享楽が、労働者階級の犠牲の上に成り立っていることを明らかにし、かつ、その思潮の真意を暴き批判したものなのである。

⑤葉聖陶の「人力車夫」が提出するのは、職業の芸術化の問題である。第二聯、農作業や製造業、文学や音楽や絵画と比較して、車夫の仕事をこのように言う。「ただひたすらいっしょうけんめい、盲目的に、運命が指し示す道に向かって走っていくだけで、／ずっと永遠に同じことを繰り返すのだ、どうして『芸術化』などされ得ようか？」職業の芸術化とは一体何を意味するのか。葉聖陶は、別の文章[14]で次のように述べている。「どんな仕事でも、主観的な観点を変えさえすれば、芸術化することができ、……それを芸術化しさえすれば、自由な真の生活となるのである。」そして、「人力車夫の苦しみは　我々が車夫の境地と感覚を推し量るにまさに芸術化されていないことによるものである。実際、勉強するにも、文章を書くにも、教師をするにも、労働者になるにも、『その味わいを知らずしてこれを為せば』、結局は一人の『人力車夫』に過ぎないのだ。我々が宇宙の間に真の興味を求め、真の事業を為そうとするならば、『予測できない』『行きたいわけでもない』道に向かって進んではならない、そうしてこそ初めて自主的で、宇宙の中心

たる人間になれるのである。」職業の芸術化とは、ただ生活の糧を得るためだけに、あるいは、ただ人に命じられるままに働くのではなく、自らの裁量と工夫によって、仕事を通じて何らかの充実感や快感が得られるようになることであろう。葉聖陶は、人力車夫の仕事を見るたびに、良心の痛みと「名状しがたい、消し去ることのできない不安感」（「人力車夫」詩中の一節：筆者）を感じ、それはなぜだろうと考える。そして、人力車夫という仕事が、人間が人間らしく生きるために理想とされる、芸術化を為し得ない職業であるからだ、と結論づけるのである。車夫の労働の苦しさの原因に迫ろうとした点で、貴重な作品であるが、議論の内容は、車夫の現実から幾分かけ離れたものであるように感じられる。

⑩劉半農の「擬擬曲（一）」と⑫聞一多の「天安門」は、ともに、政治的な事件に触発されて書かれたものである。⑩は、賄選（国会議員の買収）で大総統に当選したことで有名な直隷派軍閥の曹錕が、二四年、第二奉直戦争の敗北で失脚し、馮玉祥によって幽閉された事件である。一人の車夫が、「（曹総統は）なかなかのやり手で、使った金もはじめ相当のものだったそうだが、どうして今度は続けられなくなったんだろう？」すると、もう一人の車夫が、「昨日の晩、おまえさんに言っただろ。前門に鉄道を造って、風水を壊したのさ。」「（彼らは）騒々しくやって来て、騒々しく去って行くだけ、苦しい目に遭うのは、おれたち庶民なのさ。」軍閥統治下の政治の混乱が、庶民の眼にどのように映っているか。そして、その混乱の影響を真っ先に受けるのが、そこに暮らす貧しい人々であることを、車夫の口吻を借りて、喝破しているのである。⑫は、二六年三月一八日、請願に赴いた愛国運動のデモ隊に向かって、段祺瑞の衛兵隊が発砲し、二百人以上の死傷者を出した事件である。車夫が見たという、不気味で恐ろしい風体をしたおびただしい数の「鬼」たちは、明らかにこの発砲事件で犠牲となった学生たちである。その「鬼」たちは、死者となっても、（八行目）[15]「まだ白旗を振りながら、演説をしている。」（九行目）「まだ会議を開いている。」作者は、犠牲者を悼むと同時に、学生たちの熱い愛国の情と不屈の精神を讃え、彼らを惨殺した政府の非道に怒りと抗議を表している。では、車夫は、現場の惨状を語るためだけに登場するのであろうか。二五行目から三十行目までに注目したい。「旦那、この世の中本当に不思議なことがあるもんですぜ。／この学生たちは飲むのも食べるのも困っていないのに、／余計なことをして命を投げ出すなんて。／あっしの二叔は去年楊柳青で死にやしたが、／食うに困って戦争に行ったんです。／誰がむざむざと老い先短い命を閻魔大王に捧げましょうや！」車夫には、学生たちの行動が、無意味で無謀なものとしか感じられない。愛国的行動に対する民衆の無理解、このモチーフは、魯迅の「薬」における、革命家の血を滴らせた人血饅頭を手に入れる茶館の主人を想起させる。車夫の貧しさに対する同情が基調となっている車夫文学の中で、車夫の政治的無自覚を指摘しているのは、きわめて異色であると言えよう。

この二首には、創作の契機以外に、もう一つ共通する特徴がある。それは、人力車夫が庶民の代表として扱われている、ということである。換言すれば、作者が描きたいのは、人力車夫そのものではなく、貧しい一般庶民なのである。庶民の中で、事件とその感想、あるいは自分自身の生活や心情を語らせるのに、最も自然で都合がいいのが、人力車夫だったのである。

庶民の代表に過ぎなかった人力車夫を、それぞれの作者が、一個の人間としてクローズアップして描いたのが、⑪劉半農の「擬擬曲（二）」と⑬聞一多の「飛毛腿」である。⑪は、老九、⑬は、飛毛腿と、車夫に固有の呼び名が与えられていることも、他の人力車夫詩に見られない特徴である。この二作品を、車夫の命運を全体的に把握し、その精神世界にまで深く踏みいった作品として、後の小説『駱駝祥子』に比す研究者もいる。[16]人力車夫を描いた白話詩に、物語性・ドラマ性を備えた作品が生まれた、と言うことができるかもしれない。主題の面から言えば、⑪「擬擬曲（二）」は、細部には、彼の善良な人柄や家庭生活の不幸などが織り込まれているものの、基本的には、老九の苦難の一生を同情のまなざしで描いたもので、人力車夫文学の主流的主題から逸脱するものではない。

それに対して、⑬「飛毛腿」の車夫は、従来の車夫のイメージとは著しく異なっている。まず、飛毛腿という綽名から、壮健な俊足の車夫であることが想像される。また、その行動は、他の車夫仲間には、不可解で奇妙なものと映っている。「半日働いたら半日休み、」（二行目）「一日に少なくとも二、三両の白乾児を飲まずにいられず、」（三行目）「ほろ酔い機嫌で人を無理矢理誘ってはおしゃべりに興じる。」（四行目）「その上、簫なんか吹いてどうするんだ、あの様を見ろよ」（七行目）。足の速い元気な車夫であれば、一生懸命働けば、かなりの収入が得られるはずなのに、彼はどうしてそうしないのか。この点については、解釈が分かれていて、彼は豊かな精神世界を持っており、普通の労働生活を送るだけではなく、生活を楽しんでいるのだ、という説[17]と、生活に追われ、希望もないため、苦悩を感ぜざるを得なかったから、半日休んでは、毎日白乾児を飲むような生活だったのだ、という説[18]などがある。要するに、心のゆとりなのか、憂さ晴らしなのか、ということであるが、明白な判断は下しがたい。しかし、貧しいとはいえ、生活に汲々とすることなく、おしゃべりを楽しみ、音楽をたしなみ、商売道具（人力車）を大切にして磨き上げることに余念のない、一風変わった愛すべき一人の車

夫が、見事に浮かび上がってくる。ところが、楽観的な人生を送っていたかに見える飛毛腿が、詩の最後の二行、「ああ！　あの日、河に飛毛腿の死体が浮かんでいた、……／飛毛腿の女房はまずいときに死んだものだ。」、悲劇的な最後を遂げるのである。彼の死は、不慮の事故である可能性もなくはないが、おそらくは投身自殺であろう。自殺の原因は、妻の死によって生きることに絶望したからであろうか。詩には、何の説明もない。読者は、ただ、話の急な展開に衝撃を受け、その背後に何か不気味な暗い影を感じ取るのみである。作者は、善良で陽気な飛毛腿さえも死に追いやった、暗黒の社会を告発しようとしたのであろうか。細部の説明や主題の明白な提示もなく、その解釈がすべて読者にゆだねられているような詩である。その中で、飛毛腿という一人の車夫の人物像が、謎めいた魅力を持って、ひときわ鮮やかな印象を残すのである。

五、おわりに

以上、人力車夫を描いた白話詩十四首について、題材論の観点から検討を加えてきた。ここで、もう一度、全体的な傾向と特徴を、時間軸に沿って簡単に整理しておきたい。

人力車夫を描いた白話詩の歴史は、一九一八年の白話詩の誕生と同時に始まっている。沈尹黙と胡適の「人力車夫」をはじめとして、二二年頃までの作品は、乗客としての車夫に対する同情が創作の動機となっており、主として車夫の貧困や労働の厳しさが描かれている。[19] 発想や表現の方法に発展・変化が生じたのは、二四年、劉半農の「擬擬曲（一）」が世に問われた頃からである。主題や内容の深化・拡大とともに、言語や形式の面でも意欲的な実験がなされている。本稿では論及していないが、劉半農の二作品は、彼が追求した「増多詩体」の一つの試みであり、聞一多の二作品も、新詩の言語を精錬するための実践であった。これは、白話によって表現することと新思想を盛り込むことに意を用いるあまり、詩の芸術性が疎かにされていることへの反省と批判、という新詩の発展過程とほぼ軌を一にしている。また、内容の充実は、必然的に詩の長篇化をもたらした。

こうして、人力車夫を題材とする白話詩は、新詩の歴史の中に確かな最初の一歩を刻印し、その成果は、やがて、より広範な題材へと引き継がれていったのである。

注

(1)　『愛知教育大学研究報告』（人文・社会科学）第四五輯、一九九六年。『愛知教育大学研究報告』（人文・社会科学）第四八輯、一九九九年。

(2)　例えば、龍泉明『中国新詩流変論』（人民文学出版社、一九九九年）、祝寛『五四新詩史』（陝西師範大学出版社、一九八七年）等。

(3)　「擬擬曲（一）」と「擬擬曲（二）」が最初に発表されたとき、（一）（二）という番号がついていたわけではない。後に、詩集『揚鞭集』（中巻）に収録するとき加えられたものであるが、本稿では、便宜上『揚鞭集』に従う。

(4)　陳南士の新詩は、この他、同誌同号にもう一首、さらにその後、第一巻第二号に一首と雑訳詩二十首、第一巻第五号に一首、第二巻第一号に一首、第二巻第二号に五首掲載されている。また、朱自清編選『中国新文学大系』第八集・詩集（上海良友図書印刷公司、一九三五年十月初版。ここでは、一九三六年八月三版に拠る）にも、二首採られている。同書の巻頭の「詩話」に、収録作品の作者の簡単な解説が記されているが、彼については、出身地も著書等も一切書かれておらず、ただ「『詩』一巻二号、二巻二号各一首を録す」とあるのみである。文学研究会の機関誌である『詩』に、創刊号以来多くの詩を載せていることから、文学研究会の会員であるか、もしくは会員と親しい関係にある人物だと考えられるが、残念ながら、現在のところ、詳細はわからない。

(5)　『鄭州大学学報』（哲学社会科学版）第三一巻第六期、一九九八年十一月、八十頁。

(6)　「甘苦寸心知―談自己的詩《洋車夫》、《販魚郎》」（『江城文芸叢刊』第四期、一九八〇年四月）所収。未見。ここでは、『臧克家研究資料』（甘粛人民出版社、一九九〇年）に拠る。一六五頁～一六七頁。

(7)　『嘗試集』に収録時、改作の結果、この最終行は削除されている。

(8)　注(5)所掲論文「新文学早期的人力車夫形象」、八一頁。

(9)　銭光培・向遠『現代詩人及流派瑣談』（人民文学出版社、一九八二年）によれば、沈尹黙の新詩の特徴は、「自分の言葉で直接言い表さないで、含蓄を重視すること」であり、彼は、「努めて詩を絵画のように描き、音節の形象性を追求し、含蓄を重んじ」（一五頁）ている。この詩の解釈に複数の可能性が考えられるのは、こうした彼の創作態度によるものであろう。

(10)　例えば、注(2)の『中国新詩流変論』五〇頁。

(11)　例えば、注(2)の『五四新詩史』一六二頁。

(12)　「文学改良芻議」（『新青年』第二巻第五号、一九一七年一月）

(13)　この詩の社会思想的背景については、中共中央文献研究室編『周恩来年譜一八九八―一九四九』（中央文献出版社、一九八九年、三六頁）に指摘されている。

(14)　郭紹虞「芸術談」（『晨報・副刊』一九二〇年八月十九日）の「職業的芸術化」と題する章の中で、ここ数日の間に友人の聖陶から送られた手紙より抜粋する、と断った上で、引用されている文章である。なお、この引用にすぐ続いて、葉聖陶の詩「人力車夫」が載せられている。つまり、実質的には、この文章は、作者による創作の動機や背景を解説したものである。

(15)　「天安門」は、最初『晨報・副刊』に発表されたが、後に詩集『死水』に収録するとき、大幅な修正改作が加えられている。ここでは、最初の『晨報・副刊』掲載時のものをテキストとする。

(16)　「擬擬曲（二）」については、注(5)所掲論文「新文学早期的人力車夫形象」、八一頁。「飛毛腿」

については、王富仁主編『聞一多名作欣賞』（中国和平出版社、一九九三年）、四一八頁。

(17) 『聞一多名作欣賞』、四一六頁～四一七頁。

(18) 魯非・凡尼『聞一多作品欣賞』（広西人民出版社、一九八二年）、八五頁。

(19) 本文で言及した作品とは別に、人力車に乗った乗客を主人公とする白話詩が、一首ある。場所は、上海と思しき租界の公園入口。その前の道を、一人の人力車夫（黄包車夫：原文）が全力疾走で駆けていく。乗っているのは、上流階級で厳粛な顔つきをした東方のクロポトキン（東方克魯巴特金：原文）。天気は上々である。車上の人は、何やらぶつぶつつぶやいているようだが、にやっとして通り過ぎたとき、風に乗って聞こえてきたのは、人道、人道と言う低い声だった。

作者は、光佛（署名）、詩の題は、「公園門口」。『分類白話詩選』（上海崇文書局、一九二〇年。ここでは、人民文学出版社版（一九八八年）に拠っている）に収録されている一首である。正確な発表（執筆）年月は未詳であるが、同書が出版された二〇年以前、つまり最初期の白話詩であることは間違いない。また、光佛は、査光佛かとも思われるが、現時点では未確認である。さて、この詩は、明らかに、車夫への同情を示すことではなく、人道主義を唱えながら、人力車に悠然と乗っている、車上の人を批判的に描くことに主眼が置かれていると考えられる。あるいは、車夫への同情を示す白話詩「人力車夫」を書いた、胡適や沈尹默を諷刺しているのかもしれない。今は、参考のために、当時このような詩もあったことを指摘するにとどめる。

※なお、本稿では、紙幅の関係上、言及した作品の引用は、日本語訳や要約のみとし、原文は割愛した。

（平成十二年九月一一日受理）